

# GOD WITH US

Part 12: THE APOCALYPSE  
Message 4 – Revelation 19-22  
God With Us

## 神はわれらと共に

パート 12：アポカリユプシス（黙示録）  
第 4 メッセージ—ヨハネの黙示録第 19-22 章  
神はわれらと共に

### はじめに

「ヨハネの黙示録」全体を通しての焦点は、「イエス・キリスト」に当てられています（黙 1:1）。イエスは、将来の出来事の覆いを取り外して、ヨハネに分かるように告知されました。第 18 章で、一連の将来の出来事を見ていきます。神は、その御心に反抗する地上のすべて地球を一掃されます。最終的な啓示と裁き的一幕で、神の子は天から降りてこられ、地上における神の義の支配を確立されます。イエスが力強く再臨され、ハルマゲドンの戦いでサタンの王国の残りの者たちを破壊されます。その後、永遠の王国が始まる前に、1000 年間地上で義の政権を確立されます。イエスは繰り返し、再び来られると告知されました。これがそのお約束の成就です。

## キリストの再臨

黙示録の他の多くの場面と同様に、このクライマックスもまた、大群衆の賛美で始まります。大バビロンに対する神の義の裁きに応じて（第 17、18 章）、人類の歴史の舞台に神の小羊が現れることを期待して、天の聖歌隊から四重の「ハレルヤ」が鳴り響きます（第 19、20 章）。神を知らない、豪華さと欲望の喜びをすべて備えた人間の都市は廃止されました。ここで、神の都が義と真理の内に確立され、イエス・キリスト、ご自身が地上の新しい王国の舵取りをされます。主の祈りを思い出しましょう：「御国を来たせたまえ。みこころの天になるごとく、地にもなさせたまえ。」この祈りは、キリストの初臨以来、まだ部分的にしか成就していません。ここで、天国が字義通り地上の王国となるときに、この主の祈りの究極の成就を見ることができます。

**19:1** この後、わたしは天の大群衆が大声で唱えるような声を聞いた、「ハレルヤ、救と栄光と力とは、われらの神のものであり、**19:2** そのさばきは、真実で正しい。神は、姦淫で地を汚した大淫婦をさばき、神の僕たちの血の報復を彼女になさったからである」。**19:3** 再び声があって、「ハレルヤ、彼女が焼かれる火の煙は、世々限りなく立ちのぼる」と言った。**19:4** すると、二十四人の長老と四つの生き物とがひれ伏し、御座にいます神を拝して言った、「アアメン、ハレルヤ」。**19:5** その時、御座から声が出て言った、「すべての神

の僕たちよ、神をおそれる者たちよ。小さき者も大いなる者も、共に、われらの神をさんびせよ」。19:6 わたしはまた、大群衆の声、多くの水の音、また激しい雷鳴のようなものを聞いた。それはこう言った、「ハレルヤ、全能者にして主なるわれらの神は、王なる支配者であられる。19:7 わたしたちは喜び楽しみ、神をあがめまつろう。小羊の婚姻の時がきて、花嫁はその用意をしたからである。19:8 彼女は、光り輝く、汚れのない麻布の衣を着ることを許された。この麻布の衣は、聖徒たちの正しい行いである」。19:9 それから、御使はわたしに言った、「書きしるせ。小羊の婚宴に招かれた者は、さいわいである」。またわたしに言った、「これらは、神の真実の言葉である」。19:10 そこで、わたしは彼の足もとにひれ伏して、彼を拝そうとした。すると、彼は言った、「そのようなことをしてはいけない。わたしは、あなたと同じ僕仲間であり、またイエスのあかしびとであるあなたの兄弟たちと同じ僕仲間である。ただ神だけを拝しなさい。イエスのあかしは、すなわち預言の霊である」。

(黙示録19:1-10)

聖書全体は、キリストの婚姻の日へと向かう一連の壮大な物語の流れです。神の民(神の花嫁)と、神の子との永遠の婚姻が成立するのは、物語の最後で起こる、キリストの再臨のときです。キリストとの婚約の期間と婚姻を待ち望む期待の期間は終了します。婚姻によって、永遠に結ばれる時が到来

し、キリストは、その花嫁を永遠の家へと連れて行ってくださいます。

キリストの花嫁の衣装(上質の亜麻布、明るく清潔)は、淫婦の衣装(紫と赤)と著しく対照的です。後者は豪華さと贅沢さを意味し、前者は純粹さと神聖さを意味します。キリストの花嫁の衣装は、聖徒の義の行いから織られています。キリストの血は、私たちを罪から清め、キリストの寛大な愛に応える私たちの義の行いは、婚姻の日のために私たちを飾ります。神の教えがあらゆる点で「飾られている」のは、義の行いを通してです(テトス2:10)。義の行いによって救いを得るのではありません、むしろ、受け手の人生において、救いの美しさを示します。義の行いは、神の深いあわれみに反応する感謝のしるしです。

神のあわれを受け入れることは、子羊との永遠の命へと繋がります。拒絶することは、子羊の御怒りと最後の対面で下される、神からの永遠の分離へと繋がります。ここで、イエス・キリストは、その美しい花嫁から、御顔を転換され、ハルマゲドンの戦いの中で神の怒りの酒ぶね(19:15;14:20)を踏まれます。これはキリストの再臨で起こります。

19:11 またわたしが見ていると、天が開かれ、見よ、そこに白い馬がいた。それに乗っているかたは、「忠実で真実な者」と呼ばれ、義によってさばき、また、戦うかたである。19:12 その目は燃える炎であり、その頭には多くの冠があった。ま

た、彼以外にはだれも知らない名がその身にしるされている。19:13 彼は血染めの衣をまとい、その名は「神の言」と呼ばれた。19:14 そして、天の軍勢が、純白で、汚れのない麻布の衣を着て、白い馬に乗り、彼に従った。19:15 その口からは、諸国民を打つために、鋭いつるぎが出ていた。彼は、鉄のつえをもって諸国民を治め、また、全能者なる神の激しい怒りの酒ぶねを踏む。19:16 その着物にも、そのもにも、「王の王、主の主」という名がしるされていた。19:17 また見ていると、ひとりの御使が太陽の中に立っていた。彼は、中空を飛んでいるすべての鳥にむかって、大声で叫んだ、「さあ、神の大宴会に集まってこい。19:18 そして、王たちの肉、将軍の肉、勇者の肉、馬の肉、馬に乗っている者の肉、また、すべての自由人と奴隷との肉、小さき者と大いなる者との肉をくらえ」。19:19 なお見ていると、獣と地の王たちと彼らの軍勢とが集まり、馬に乗っているかたとその軍勢とに対して、戦いをいどんだ。19:20 しかし、獣は捕えられ、また、この獣の前でしるしを行って、獣の刻印を受けた者とその像を拝む者とを惑わしたにせ預言者も、獣と共に捕えられた。そして、この両者とも、生きながら、硫黄の燃えている火の池に投げ込まれた。19:21 それ以外の者たちは、馬に乗っておられるかたの口から出るつるぎで切り殺され、その肉を、すべての鳥が飽きるまで食べた。（黙示録 19：11－21）

目に見えるキリストの再臨は、新約聖書の最も際立つ教えの1つです。新約聖書のほとんどの書物は、この出来事を予期しています。再臨は、初臨とは大きく異なります。初臨の際のイエスは、優しく、謙遜で、愛情深く、ご自分の尊いお命を私たちの罪の宥めの犠牲として、差し出してくださいました。神のご栄光を覆い隠され、人類の脆弱さで身を包まれて、私たちの罪のために十字架にかかってくださいました。再臨のイエスは、まったく対照的に、権威と威厳をもって裁き、戦われます。その目は燃える炎です。血に染まった衣を着ておられます。神が裁きの酒ぶねを踏まれるイザヤ書第63章で描かれた描写です。これは、黙示録第14章の終わりのさばきで見たものです：御使はそのかまを地に投げ入れて、地のぶどうを刈り集め、神の激しい怒りの大きな酒ぶねに投げ込んだ。14:20 そして、その酒ぶねが都の外で踏まれた。すると、血が酒ぶねから流れ出て、馬のくつわにとどくほどになり、一千六百丁にわたってひろがった（黙14：19，20）。これは、神の子羊を拒絶したこと、イエス様が、その計り知れない愛の故、支払ってくださった大きな犠牲の御業を拒んだことに対する神の裁きです。

獣（反キリスト）と偽預言者は、ハルマゲドンの戦いの終わりに捕らえられ、硫黄の燃えている火の池に投げ込まれます。しかし、偽の三位一体の3番目のサタンはどうでしょうか。神は、サタンに対して異なる計画を持っておられます。サタ

ンに対する最終的なさばきは間違いなく下ります。しかし、まだその時ではありませんでした。

### 地上におけるキリストの1000年の統治

**20:1** またわたしが見ていると、ひとりの御使が、底知れぬ所のかぎと大きな鎖とを手に持って、天から降りてきた。**20:2** 彼は、悪魔でありサタンである龍、すなわち、かの年を経たへびを捕えて千年の間つなぎおき、**20:3** そして、底知れぬ所に投げ込み、入口を閉じてその上に封印し、千年の期間が終るまで、諸国民を惑わすことがないようにしておいた。その後、しばらくの間だけ解放されることになっていた。**20:4** また見ていると、かず多くの座があり、その上に人々がすわっていた。そして、彼らにさばきの権が与えられていた。また、イエスのあかしをし神の言を伝えたために首を切られた人々の霊がそこにおり、また、獣をもその像をも拝まず、その刻印を額や手に受けることをしなかった人々がいた。彼らは生きかえって、キリストと共に千年の間、支配した。**20:5** (それ以外の死人は、千年の期間が終るまで生きかえらなかった。) これが第一の復活である。**20:6** この第一の復活にあずかる者は、さいわいな者であり、また聖なる者である。この人たちに対しては、第二の死はなんの力もない。彼らは神とキリストとの祭司となり、キリストと共に千年の間、支配する。(黙示録201-6)

サタンは捕らえられ、1000年間、底知れぬところに投げ込まれます。その期間、もはや地上でその欺瞞的戦略を自由に働かせることも、個人や国を欺くことも、誘惑したり、畏をしかけたりすることも、神の働きに対抗することも、人々を捕らえることもできなくなります。それが「ミレニアム(千年王国)」(「1000」を意味する)と呼ばれる期間であり、その間、イエス・キリストは、サタンによる対抗のないところで、イエスご自身が、目に見える形で、地上を支配されます。

ここは、この千年王国のキリストの治世について記されている唯一の聖書の箇所です。新約聖書の翻訳者たちによる、千年王国の意味は異なり、基本的に、3つの主要な見解があります。

**無千年王国論**：一部の人は、「千年王国」は、霊的な神の国で、今の時代の教会から成っていると理解しています。神の国とは、キリストが天から信者の心を支配しておられる状態のことです。この見解によると、サタンは、ここで拘束されており、キリストの統治は、信者がキリストとの関係を結ぶときに心の中で有効となります。この見方は「無千年王国論」と呼ばれ、「字義通り、神の国が出現するわけではない」という見解です。

**千年期後再臨説**：別の一部の人は、「千年王国」とは、現代の教会を通す福音の勝利の進歩であると理解しています。「千年期後再臨説」は、キリストの再臨は、千年王国の

前ではなく、後に起こると主張しています。したがって、黙示録第 20 章は、キリストの初臨と再臨の全期間の振り返りであって、その間、サタンが拘束されている間に、教会は福音を通して、徐々に、地上のいのちのあらゆる側面にキリストの支配をもたらします。

**千年期前再臨説**：この見解（私が保持している）によると、キリストの再臨があって、次に千年王国が設立されます。その王国は、地上で 1000 年間続く字義通りの政治的王国です。キリストが王として、生徒たちと共に全世界を統治されます。したがって、黙示録第 20 章は、再臨（第 19 章）に続き、永遠の状態（21, 22 章）に進む、連続的な出来事です。千年期前再臨説は、携挙、または死のいずれかによって、以前に地上から挙げられたキリストの聖徒たちが、再臨時にキリストと共に戻ってきて、この千年王国を共に支配すると考えられます。地上における、この 1000 年間の統治の間、キリストが、イスラエルに関する多くの旧約聖書の預言（社会的、政治的、または経済的システムの完全な平和と調和の期間について語る預言）を成就される間、サタンは拘束されています。サタンの最後の反乱と破滅は、1000 年間の後に起こります。

### サタンの解放と反乱

ここは永遠の都の前の最後の出来事です。千年王国の最後に、サタンが底知れぬところから再び解き放たれます。再び

人類を試みるためです。サタンの性質は、変わらず、神に反抗し、世界の諸国民を惑わします。サタンに従う罪人たちの数は、海辺の砂の様になります。ここは人間の心について何かを語っています。キリストご自身による統治下で、完全な状態で 1000 年間生かされたにもかかわらず、罪は依然として存在し、人間の罪深い心は、なおも神に反抗することが可能であることです。巨大な軍勢が聖徒の陣営と最愛の都を取り囲み、イエスご自身による千年王国支配の只中であっても。神がご自分の民を取り巻く、最後の軍勢を素早く破壊されると、天から火が下ってきます。イエスは、サタンを火と硫黄の池に投げ込まれます。そこは、先に偽三位一体の他の 2 人が、この 1000 年の間放り込まれていた場所です。サタンは、「火と硫黄の池」で永遠の苦しみを受けます。

**20:7** 千年の期間が終ると、サタンはその獄から解放される。**20:8** そして、出て行き、地の四方にいる諸国民、すなわちゴグ、マゴグを惑わし、彼らを戦いのために召集する。その数は、海の砂のように多い。**20:9** 彼らは地上の広い所に上ってきて、聖徒たちの陣営と愛されていた都とを包囲した。すると、天から火が下ってきて、彼らを焼き尽した。**20:10** そして、彼らを惑わした悪魔は、火と硫黄との池に投げ込まれた。そこには、獣もにせ預言者もいて、彼らは世々限りなく日夜、苦しめられるのである。（黙示録 20：7－10）

## 最終のさばき

永遠の都の前に残された唯一の出来事は、最後のさばきです。義と不義の分離です。神は、偉大な白い御座に着かれます。生きているか死んでいるかにかかわらず、すべての人類がイエスの御前に来てさばかれます。いのちの書が開かれます。古代都市には、住民登録がありました。名前が住民名簿に記載されている場合、特定の権利や特権が与えられ、特定の保護が保証されていました。名前が住民名簿に記入されていない場合は、部外者とみなされました。黙示録の最後の2章の焦点となる永遠の神の都には、神が保持される登録名簿があります。あなたの名前がいのちの書に記されている場合、扉を通過して永遠の都へと入ります。あなたの名前がいのちの書に見つからない場合、神からの永遠の分離の状態に入ります。

**20:11** また見ていると、大きな白い御座があり、そこにいますかたがあった。天も地も御顔の前から逃げ去って、あとかたもなくなった。**20:12** また、死んでいた者が、大いなる者も小さき者も共に、御座の前に立っているのが見えた。かずかずの書物が開かれたが、もう一つの書物が開かれた。これはいのちの書であった。死人はそのしわざに応じ、この書物に書かれていることにしたがって、さばかれた。**20:13** 海はその中にいる死人を出し、死も黄泉もその中にいる死人を出し、そして、おのおのそのしわざに応じて、さばきを受けた。**20:14**

それから、死も黄泉も火の池に投げ込まれた。この火の池が第二の死である。**20:15** このいのちの書に名がしるされていない者はみな、火の池に投げ込まれた。

## 新天新地

黙示録第6-20章は、休憩所のない、長く続く高速道路を走っているようなものです。天国の御座の間から絶え間なくさばき（封印、ラッパ、鉢）が下り、キリストの再臨、ハルマゲドンの戦い、サタンの最後の反乱、ゴグとマゴグの戦い、偉大な白い御座のさばき、そして、最終的には、永遠の火の池に行き着きます。聖書のこの部分を読むだけで、身が引き締まる思いがします。預言者エレミヤが、古代イスラエルに訪れようとしていた破壊のメッセージを繰り返し届けた後、「怒り」と苦悩の痛みについて、神に問い叫んだときの気持ちが理解できます。

**15:16** わたしはみ言葉を与えられて、それを食べました。み言葉は、わたしに喜びとなり、心の楽しみとなりました。万軍の神、主よ、わたしは、あなたの名をもってとなえられている者です。**15:17** わたしは笑いさざめく人のつどいにすわることなく、また喜ぶことをせず、ただひとりですわっていました。あなたの手がわたしの上であり、あなたが憤りをもってわたしを満たされたからです。**15:18** どうしてわたしの痛みは止まらず、傷は重くて、なおらないのですか。あなたはわた

しにとって、水がなくて人を欺く谷川のようになられるのですか。(エレミヤ書15:16-18)

ここまで、黙示録の裁きの言葉を飲み込み消化してきました。神の御怒りについて考えるとき、喜ばしいことは、何一つありません。神の聖さと義の重さは、不治の傷の如く感じられます。それでも、神が義であられる故に下る裁きの痛みを伴う現実に立ち向かわなければなりません(第4章の御座の間の幻)。ですから神は、黙示録のような本を私たちに残してください、預言の言葉を封印してはならないと言われまました(黙22:10)。聖霊様は黙示録を長く、難解にされ、神の最終的な裁きの日の重々しさと厳粛さを私たちに印象づけられました。これらの章を読み終える頃、神のあわれみに立ち返りたいと感じられるようになるためです。そして、それは、まさにすべての預言的警告の趣旨です。私たちが神のあわれみと恵みと愛へと向けることです。黙示録第20章の厳しい裁きの箇所にうんざりしておられるとしたら、それは適切な反応です。それが神の御心です。うんざりしたあなたが、十字架に憩いの場を見出すために必要なステップを踏むことを望んでおられます。この書物の中では「子羊」について23回、言及されていることを忘れないでください。長く困難な裁きの期間中、殺された子羊から流れるあわれみを常に思い出させます。「あわれみは裁きに打ち勝つ」(ヤコブ2:13)。

嵐の後、ようやく永遠の憩いの場に到着します。砂漠のオアシスのような、黙示録第21、22章へと進みます。これらの最後の章は、新鮮で美味しい空気の様です。裁きも、御怒りも存在しません。すべて完了し、すべてが新しくされました。永遠の都がここに出現し、二度と悪に邪魔されることはありません。このように、すべてが終わります。これが、神のみ言を聞き、耳を傾け、従うことを選んだ人々への最後の報酬です。パラダイス(エデンの園)は、創世記で失われ、黙示録第20章まで、その回復のために戦われてきました。そして、そのパラダイス(エデンの園)が、最終的に黙示録第21、22章で再び捕らえられ、回復されます。

**21:1** わたしはまた、新しい天と新しい地とを見た。先の天と地とは消え去り、海もなくなってしまった。**21:2** また、聖なる都、新しいエルサレムが、夫のために着飾った花嫁のように用意をととのえて、神のもとを出て、天から下って来るのを見た。**21:3** また、御座から大きな声が叫ぶのを聞いた、「見よ、神の幕屋が人と共にあり、神が人と共に住み、人は神の民となり、神自ら人と共にいまして、**21:4** 人の目から涙を全くぬぐいにとって下さる。もはや、死もなく、悲しみも、叫びも、痛みもない。先のものが、すでに過ぎ去ったからである」。**21:5** すると、御座にいますかたが言われた、「見よ、わたしはすべてのものを新たにする」。また言われた、「書きしるせ。これらの言葉は、信ずべきであり、まことで

ある」。21:6 そして、わたしに仰せられた、「事はすでに成った。わたしは、アルパでありオメガである。初めであり終りである。かわいている者には、いのちの水の泉から価なしに飲ませよう。21:7 勝利を得る者は、これらのものを受け継ぐであろう。わたしは彼の神となり、彼はわたしの子となる。21:8 しかし、おくびょうな者、信じない者、忌むべき者、人殺し、姦淫を行う者、まじないをする者、偶像を拜む者、すべて偽りを言う者には、火と硫黄の燃えている池が、彼らの受くべき報いである。これが第二の死である」。

(黙示録 21 : 1 - 8)

ここで、私たちと一緒にいたいと切望してくださっている神の愛が見られます。第3節をよく見てください。「見よ、神の幕屋が人と共にあり、神が人と共に住み、人は神の民となり、神自ら人と共にいまして. . . 」。パラダイス(エデンの園)では、神自らが、再び私たちと共に住んでくださる場所です。これ以上、分離も、距離も、仲介も、覆いも必要ありません。神は、永遠に私たちの間に宿ってくださるので、そして、それこそが(神と人が一緒に住む樂園の回復について、私たちに話してくださること)が、この最後の2章の趣旨です。

### 子羊の妻、花嫁！

以前、地上に怒りの鉢を注ぎ出した、7人の御使いの1人が、ここでヨハネに「子羊の妻である花嫁(新しいエルサレム)」

を見せるために連れて行きます。ヨハネは、聖なる都エルサレムが、神の御元の天から降りてくるのを見ます。次の部分では、天の「都」とその都の民との間に微妙な重複があります。最初は住民に焦点が当てられているように見え(w.9-14)、次に焦点は、全うされた義人たちが住む都の寸法や設計へと移ります(w.15-27)。厳密に言えば、ここは、都自体が子羊の妻であることを暗示しているように見えますが、都の民が子羊の妻であり、都は、その永遠の故郷であると言う方が理にかなっています。

### 民

21:9 最後の七つの災害が満ちている七つの鉢を持っていた七人の御使のひとりがきて、わたしに語って言った、「さあ、きなさい。小羊の妻なる花嫁を見せよう」。21:10 この御使は、わたしを御霊に感じたまま、大きな高い山に連れて行き、聖都エルサレムが、神の栄光のうちに、神のみもとを出て天から下って来るのを見せてくれた。21:11 その都の輝きは、高価な宝石のようであり、透明な碧玉のようであった。21:12 それには大きな、高い城壁があって、十二の門があり、それらの門には、十二の御使がおり、イスラエルの子らの十二部族の名が、それに書いてあった。21:13 東に三つの門、北に三つの門、南に三つの門、西に三つの門があっ

た。21:14 また都の城壁には十二の土台があり、それには小羊の十二使徒の十二の名が書いてあった。(黙示録21:9-14)

都の名前であるエルサレムは、旧約聖書と新約聖書の両方の時代における、神の働きの継続性を示しています。イスラエルの12部族を表す12の門と、子羊の12人の御使いに因んで名付けられた12の礎石は、キリストの前後の時代のすべての聖徒を表しています。これらは永遠の都の民であり、キリストの花嫁であり、キリストと共にある者として識別された人々です。次にヨハネは、子羊とその民の永遠の故郷である天の都そのものの描写へと連れていかれます。

## 都

21:15 わたしに語っていた者は、都とその門と城壁とを測るために、金の測りざおを持っていた。21:16 都は方形であって、その長さとは幅とは同じである。彼がその測りざおで都を測ると、一万二千丁であった。長さとは幅と高さとは、いずれも同じである。21:17 また城壁を測ると、百四十四キュビトであった。これは人間の、すなわち、御使の尺度によるのである。21:18 城壁は碧玉で築かれ、都はすきとおったガラスのような純金で造られていた。21:19 都の城壁の土台は、さまざまな宝石で飾られていた。第一の土台は碧玉、第二はサファイヤ、第三はめのう、第四は緑玉、21:20 第五は縞めのう、第六は赤めのう、第七はかんらん石、第八は緑柱石、第九は黄玉

石、第十はひすい、第十一は青玉、第十二は紫水晶であった。21:21 十二の門は十二の真珠であり、門はそれぞれ一つの真珠で造られ、都の大通りは、すきとおったガラスのような純金であった。21:22 わたしは、この都の中には聖所を見なかった。全能者にして主なる神と小羊とが、その聖所なのである。21:23 都は、日や月がそれを照す必要がない。神の栄光が都を明るくし、小羊が都のあかりだからである。21:24 諸国民は都の光の中を歩き、地の王たちは、自分たちの光栄をそこに携えて来る。21:25 都の門は、終日、閉ざされることはない。そこには夜がないからである。21:26 人々は、諸国民の光栄とほまれとをそこに携えて来る。21:27 しかし、汚れた者や、忌むべきこと及び偽りを行う者は、その中に決してはいれない。はいれる者は、小羊のいのちの書に名をしるされている者だけである。(黙示録21:15-27)

永遠の都は単なる思想ではありません。形と実質と内容があります。私は、ヨハネが見ているものの文字通りの理解に傾いています。この都は、長さ、幅、高さが1,500マイルの巨大な立方体のようなものです。複数の層があることを示唆する人たちもいます。1,500階建ての建物を想像してみてください。各階は、広大な土地を有するインドよりも大きく、各階の間に1マイルの空間があることを想像してみてください。人類の歴史上最大の規模の都市です。

都の驚くべき材質による景観は、その栄光を示しています。まるで巨大な宝石のようで、光の中できらめきます。最も重要なことは、主なる神と子羊が都の中心におられることです。神こそが「神殿」であられ、「光」です。すべての栄光と名誉は神と子羊に集中し、すべての人が神と交わりながら歩みます。

### 園に戻る

聖書の最後の章が、都だけでなく、都の中心に据えられた園の説明で始まるのは偶然ではありません。聖書の物語は、エデンの園で始まりました。そこで、人が墮落しました。物事が再び正しく作られる園で終わることは、非常に適切なことです。

**22:1** 御使はまた、水晶のように輝いているいのちの水の川をわたしに見せてくれた。この川は、神と小羊との御座から出て、**22:2** 都の大通りの中央を流れている。川の両側にはいのちの木があって、十二種の実を結び、その実は毎月みのり、その木の葉は諸国民をいやす。**22:3** のろむべきものは、もはや何ひとつない。神と小羊との御座は都の中にあり、その僕たちは彼を礼拝し、**22:4** 御顔を仰ぎ見るのである。彼らの額には、御名がしるされている。**22:5** 夜は、もはやない。あかりも太陽の光も、いらぬ。主なる神が彼らを照し、そして、彼らは世々限りなく支配する。（黙示録 22：1－5）

神と子羊の御座から流れ出る水の川のイメージは明確です。神と子羊がいのちの水の源です。彼らのご臨在そのものが永遠の都の住民を養います。さらに、川の両側にいのちの木が見えます。エデンの園のいのちの木を思い出してください。いのちを永遠に維持する力を持っていた木です。墮落後、神は、アダムとエバがいのちの木から取って食べることができないようにされました。彼らが墮落した状態で、永遠に生きなくてよいためです。ここで、いのちの木が都の真ん中に現れます、**12** 種類の豊かな果実が実ります！永遠に、食することの喜びが与えられ、満ち足りた生活の保障が与えられ、豊富に提供されます。私たちは、再び神と共に、「エデンの園に」戻ります。「神の御顔を見る」ことができるようになります。物語は完了し、任務が完了します。神は、ご自分の民をご自身の元に戻されました。

### 追記

**22:6** 彼はまた、わたしに言った、「これらの言葉は信ずべきであり、まことである。預言者たちのたましいの神なる主は、すぐにも起るべきことをその僕たちに示そうとして、御使をつかわされたのである。**22:7** 見よ、わたしは、すぐに来る。この書の預言の言葉を守る者は、さいわいである」。  
（黙示録 22：6，7）

黙示録は、神からの預言のみ言であり、神の僕たちが読むために与えられた書物であることを改めて思い起こさせます。この本の冒頭の祝福を思い起こしましょう。「**1:3** この預言の言葉を朗読する者と、これを聞いて、その中に書かれていることを守る者たちとは、さいわいである。時が近づいているからである。（黙示録 1：3）。」

**22:8** これらのことを見聞きした者は、このヨハネである。わたしが見聞きした時、それらのことを示してくれた御使の足もとにひれ伏して拝そうとすると、**22:9** 彼は言った、「そのようなことをしてはいけない。わたしは、あなたや、あなたの兄弟である預言者たちや、この書の言葉を守る者たちと、同じ僕仲間である。ただ神だけを拝しなさい」。

（黙示録 22：8－9）

全体的な預言の体験は、ヨハネを圧倒し、ヨハネは、天使の足元で崇拜しようとひれ伏しましたが、善良な天使は、人間の崇拜を受け入れません。神だけが私たちの礼拝に値するお方だからです。

**22:10** またわたしに言った、「この書の預言の言葉を封じてはならない。時が近づいているからである。**22:11** 不義な者はさらに不義を行い、汚れた者はさらに汚れたことを行い、義なる者はさらに義を行い、聖なる者はさらに聖なることを行うままにさせよ」。（黙示録 22：10－11）

この最も神聖な書物の封印は、イエスご自身によって解かれました。最後の勧告は、本を再び封印しないことです。人類が読めるように開いたままにしておくように告げられました。第 22 章 11 節の妙なみ言は、イエスが戻られる直前に地上で生きている人々を対象としているようです。悔い改めの時が過ぎたようです。人々の運命が 2 分され、確定します。クリスチャンは、キリストに従い、ますます清潔に進み続け、クリスチャンでない人々は、キリストから離れ、黙示録を拒否し続けます。人々は、自分の意思で選んだ状態で、イエス・キリストの御前に立ち、向き合います。

最後に、イエス様の語りによって書物が締めくくられます。

**22:12** 「見よ、わたしはすぐに来る。報いを携えてきて、それぞれのしわざに応じて報いよう。**22:13** わたしはアルパであり、オメガである。最初の者であり、最後の者である。初めであり、終りである。**22:14** いのちの木にあずかる特権を与えられ、また門をとおって都にはいるために、自分の着物を洗う者たちは、さいわいである。**22:15** 犬ども、まじないをする者、姦淫を行う者、人殺し、偶像を拝む者、また、偽りを好みかつこれを行う者はみな、外に出されている。**22:16** わたしイエスは、使をつかわして、諸教会のために、これらのことをあなたがたにあかした。わたしは、ダビデの若枝また子孫であり、輝く明けの明星である」。（黙示録 22：12－16）

黙示録第1章8節のアルファであり、オメガであるとは、誰のことでしょうか？それは全能の神、主でした。黙示録第22章13節のアルファであり、オメガであるとは誰のことでしょうか？『きたるべきかた』イエスです。子羊の血で衣を洗った人は、いのちの木に永遠にアクセスできます。イエスの血によって清められなかった人々は、永遠の都の外に永久に残されます。

それから、イエスの到来に備えるための最後の招待状。

**22:17** 御霊も花嫁も共に言った、「きたりませ」。また、聞く者も「きたりませ」と言いなさい。かわいている者はここに来るがよい。いのちの水がほしい者は、価なしにそれを受けるとよい。（黙示録22：17）

黙示録がそれを読む人々に祝福を約束する唯一の本であると同時に、それに追加したり、取り除く人々に呪いを約束する唯一の本でもあります。

**22:18** この書の預言の言葉を聞くすべての人々に対して、わたしは警告する。もしこれに書き加える者があれば、神はその人に、この書に書かれている災害を加えられる。**22:19** また、もしこの預言の書の言葉をとり除く者があれば、神はその人の受くべき分を、この書に書かれているいのちの木と聖なる都から、とり除かれる。**22:20** これらのことをあかしするかたが仰せになる、「しかり、わたしはすぐに来る」。アアメ

ン、主イエスよ、きたりませ。**22:21** 主イエスの恵みが、一同の者と共にあるように。（黙示録22：18－21）

人々は、この本のみ言に記されていることを超期して、神からの新しい啓示を提案することによって、黙示録の預言に「追加」します。黙示録の完成に伴い、靈感を受けた書物（神からのみ言）の新約聖書の全集は閉じられました。人々は黙示録の預言の重要性を最小化したり、否定することによって、これらの預言は神話的であり、事実ではないと示唆しています。それらは神話的であり、真実ではないということです。肝心なのは、黙示録を「聖典」として最も尊重し、新約聖書の他の26巻と旧約聖書の39巻を保持する必要があるということです。したがって、ヨハネの黙示録は、イエス・キリストが再臨される前の、神から人類へ与えられた「最後のみ言」です。これが壮大な物語の終わりです。頻繁に読んで、完全に信じましょう。